坪内良博著

『東南アジア人口民族誌』

勁草書房　1986年　viii＋197＋vページ

I

本書は東南アジア学選書（全20巻）の一冊に編まれたものである。書名が『人口民族誌』となっているのは，著者によれば「雑多な記述がそのまま記載されている側面を重視した」からということである。本書は19世紀を出発点として東南アジアの人口の変遷をさまざまな資料と著者のフィールドワークの成果をおりまぜて解き明かしたものである。

周知のように東南アジアの多くの国々で人口センサスなどのデータを利用できるようになったのは今世紀に入ってからのことである。人口学では通常センサスなどの静態統計あるいは出生，死亡，結婚などの動態統計を最も基本的な統計として利用する。そして，これらのデータを用いた統計的な分析手法は形式人口学として確固たる地位を占めている。しかしながら，本書の対象とするような19世紀を中心とした時代の人口，すなわちセンサス以前の人口を扱う場合には包括的なデータが得られず断片的な記録によらざるをえない。

本書はこのような東南アジア各地の人口記録の断片的資料や著者によるフィールドワークから入手したデータを利用し，人口を復元，推定し，当時の人口状況を数量的に明らかにすることにより，現代との係わりあいにも触れて東南アジア人口を論じたものである。

本書の構成は7章からなっているが，あとがきによれば第Ⅲ章を除いては今までに他の専門雑誌（『東南アジア研究』，『人口学研究』など）に論文として発表されたものである。それらはいずれも本書より詳しい内容をふくんでいるという。したがってどの章もある程度独立しているといえる。

本書の構成を以下に示す。

Ⅰ　小人口世界の構造，Ⅱ　人口増加のしくみ，Ⅲ　出生と死亡，Ⅳ　開拓と定住，Ⅴ　都市と移民，Ⅵ　疎人口分布と小国家，Ⅶ　連続と非連続

II

次に各章ごとに簡単に内容を紹介する。第Ⅰ章から第Ⅵ章までは東南アジア人口の19世紀的人口状況の数量的かつ具体的な記述であり，第Ⅶ章は19世紀的人口状況と現代との係わりを述べている。

第Ⅰ章「小人口世界の構造」では，著者は19世紀の東南アジア人口の特質を希薄性，多様性，小規模性，相互独立性と規定している。

世界の人口の歴史をみると，アジア人口は常に規模が相対的に大きく世界の中心を形成してきた。しかしながら，そのなかで東南アジアはその人口分布の相対的な希薄性（人口密度の低さ）によって特異な地位をしめてきたとし，著者は東南アジアの人口分布を「大空間的小人口構造」と名付けている。巨大人口を擁する中国大陸とインド亜大陸との中間に位置することによって，その存在の特性が際立っていたという。

当時の人口推計を基にして東南アジア，中国本土，インド（パキスタン，バングラデシュを含む，以下同様）を比較し，これら3者は面積では同程度であるが1850年ごろの人口を比べると中国は東南アジア（4200万人）の10倍，インドは5.4倍の人口量を擁していた。そしてさらに1600年ごろの東南アジア人口は当時の日本人口（2210万人）をも下回るものであったという（1984年の東南アジア人口は3億9000万人であり，中国は10億5000万人，インドは9億4000万人で，これらは東南アジア人口のそれぞれ2.7倍，2.4倍である）。

東南アジアのもう一つの特徴として都市の未発達をあげることができるとし，東南アジアで19世紀中葉までに人口10万を超えた都市は12を数えるにすぎず，人口20万を超える都市は19世紀中葉までには現われなかった。このことは大都市が多数現出した中国，インドとは対照的であるという。

東南アジア大陸部に関する人口の希薄性についてはW・ゼリンスキーの指摘を示し，その原因としてインドシナ半島の立地の通路的性格および核心地域の狭小性に由来する政治的軍事的不安定性，農業生産技術そのものの非能率性を挙げている。また人口分布については島嶼部はさらに希薄であった。

東南アジア人口の小規模性については，その根拠の一つに言語をあげている。東南アジアの全人口は1800年の時点で3150万人，1850年で4200万人程度であったと想定

されるが，この比較的小さい人口量が少なくとも150以上の言語グループに分かれていた。

第Ⅱ章「人口増加のしくみ」では，東南アジア諸国においては，住民の戸籍ないしは登録簿が過去のベトナムにおいて徴税や兵役のために作成されたが，大部分の国においては現在においてもほとんど不備であり，せいぜい各人ごとの出生証明，結婚証明，身分証明などにとどまっているとする。また近代的センサスが行なわれたのは今世紀に入ってからのことである。したがって，人口学的なオーソドックスな手法を過去の東南アジア人口に対して適用することは困難であるとして，たとえばヨーロッパにおける教会の洗礼，結婚，埋葬を基にした歴史人口学的復元はフィリピンのようなキリスト教徒の地域では一部可能であるが，非キリスト教徒地域では他の方法を考慮しなければならないとし，一例として南スマトラの系図による父子比率を基にした人口増加率が示されている。

第Ⅲ章「出生と死亡」では，当時の社会は高死亡，高出生の世界であり，それにさまざまな風土病，伝染病，戦争，飢餓なども加わって人口増加の趨勢は必ずしも平坦ではなかった，しかしながら，一般的に言って人口の希薄性，食物の成育に適した気候による人口支持力は常に高かったという。人口の希薄性が特徴としてあげられる東南アジアでは，面積の問題として人口支持力が問題になるのはよほど後のことといわねばならないとしている。

第Ⅳ章「開拓と定住」では，伝統的居住と開拓移住について述べ，人口増加が生じても，土地の余裕があるかぎり開拓地への移住が行なわれてきたという。自主的移住による集落形成の例，デルタの開発と定住についても触れている。

第Ⅴ章「都市と移民」では，東南アジアの都市形成における移民の重要な役割に触れている。シンガポール，マラッカ，ペナンなどの海峡植民地の都市はいずれも無人の地に都市を築き，人口増加はほとんど人口移動によるものであった。マレー人，中国人，インド人からなっているが，初期の移住者は男の割合が際立って大きかった。

その他の都市も海峡植民地の各都市と似通った成長を遂げた。幾つかの都市における中国人とインド人移民の割合を示し，東南アジアには大量のインド人や中国人の移住があったことを示している。

都市の多民族性は植民地にかぎらずバンコクも同様であり，このことは19世紀バンコクのニューロードの状況を著者の調査で明らかにしている。1883年当時のバンコクの郵便家屋台帳を手掛りとして当時のバンコクの家屋群を再現する。バンコクは中国，インドなどからの移住者を受入れて急激に成長してきた都市であり，この家屋群の戸主の姓名，職業，家屋の形状などの情報をもとにして当時のバンコクの中国人とタイ人の居住の割合，同化の状況，職業構成などさまざまな推定を行なっている。

第Ⅶ章「連続と非連続」で，著者は東南アジアの人口状況の現代への連続性をどう捉えるかについて詳細に述べている。本書の結論ともいえる章なのでやや詳しく内容を紹介することにする。著者は現代の東南アジアではこれまで述べた19世紀的な状況がほとんど消失しているという。伝染病，風土病が減少し，このため人口量および人口密度が昔日ときわめて異なっている。この状況に至る過程の連続性にもかかわらず，現代の東南アジアをすでに過去に対する正反対の極として捉えなければならないという。土地人口比，集団的距離（コミュニティ間の距離）を含めて決定的な差が生じたのである。このため，元来都市居住の伝統を欠く東南アジア土着民を巻き込んで，政治的中心の首都人口が突出するいわゆるプライメートシティの形成も，分断された人口集団状況から統合された全体としての国民国家が発生機能するのも，このような人口状況を背景にしている。ほとんど空白の地に中国，インドなどから大量の移民が流入してきた状況も，一定の人口量の達成と民族主義高揚のための移民制限によって事実上の停止にむかい，すでに定着した移民の土着化が進行しているという。

人口密度の上昇と行政組織の確立にともなって，国内の移動は過去におけるほど自由にはいかなくなっているが，東南アジアでは伝統的にフロンティアへの移動を含む村落間移動が移動現象のなかで重要な役割を果たしてきた。これは，全人口に対して都市人口が相対的に小さかったために都市自体が急速な人口増加をとげたにもかかわらず村落間移動が依然として移動量の大きな割合を占めてきたという理由によっている。また遠距離移動も人口希薄な原人口分布を有していた東南アジアでは，土着民の移動のほかに，中国，インドからの移民が重要な構成要素となった。移民の量がきわめて多かったことが今日の複合社会の基礎となった。東南アジアにおける民族主義の興隆および国家形成の進展に伴い，中国やインドあるいは東南アジア内の他国からの移民はきわめてか

ぎられるようになり，それに伴って国家内の移動が重要な役割を果たすようになった。最近の国家内の遠距離移動の例はインドネシアの政府による外島移民計画にみられるという。

土着民および遠距離移民の都市流入に際しては，フロンティアへの移動と同様，前住地における血縁地縁が重要な役割を果たしている。都市内部において出身地による結合が地理的分布あるいは社会的活動として観察される。

著者は文化とのかかわりで人口現象をとらえると，東南アジアの文化的背景がその自然環境とともに人口増加に対してきわめて有利に作用したことを明らかにしている。広大なフロンティアの存在を背景に，東南アジアの人口は，近年に至るまで社会的経済的観点から人口を人為的に抑制すべき積極的な理由を持たなかった。多くの地域において親族の構造・維持に関しては双系的な理念が展開された。そして，双系的親族構造を背景とする住民の多くは，人口維持に対して出生力，結婚などの側面において特徴的な対応を行なう必要がなかったし，多産に対しても少産にたいしても決定的な誘因は存在しなかったという。これらのことから，東南アジア諸地域では，特に人口増加を目的とする対応も，逆に人口制限を目指した対応も行なわれなかったことを示唆しているという。

東南アジアの多くの地域では，近年に至るまで，文化的行動としての人口現象の諸側面は文化自体による決定に委ねられてきたのであり，生活環境によって厳しい規制を受けることがなかった。出生制限の必要が浮上してきた場合には，出生にかかわる慣習的な文化がときには出生力の人為的な制限の妨げとなる場合があるが（たとえばカトリックやイスラム教の例），一方父系原理の確立していない諸民族においては，男児出生に対する執着が存在しないために，家族計画のうけいれが容易な側面をもっているといえるとしている。

Ⅲ

本書は東南アジアの人口変動を資料の制約にもかかわらずさまざまな具体的事例を多数引用して数量的に明らかにしている。植民地時代の主にヨーロッパ人の記録からの人口推定，さらに著者自身のフィールドワークによる資料の発掘，父子率なるものを計算した人口増加率の推計，バンコク・ニューロードの郵便配達夫のために作成した郵便家屋台帳による19世紀バンコクの住民の分析などが興味をひいた。ニューロードの例では，残念ながら本書では省かれているが，オリジナル論文ではこの背景説明がある。それによると著者らがバンコクの国会図書館で郵便配達夫の手引となる『バンコク郵便職員のための市民住民リスト』を見つけ，マイクロフィルムに収めて持帰り，それから家屋台帳のすべての家屋を対象に1万7540枚のカードを作成しそれをさまざまに分類し……とあり，このような過去の復元作業がいかに時間と労力を要するものであるかが実感として伝わってくる。

本書の内容は非常に多岐にわたっているがこれを一口に言えば東南アジアの人口転換といってよいであろう。人口転換理論そのものは高出生，高死亡の人口構造が非常に長い年月をかけて低死亡，低出生に移行したという先進国の例にもとづく経験法則である。そして，現在の発展途上国における人口問題の要因の一つは，通常この人口転換が途上国ではあまりにも短期間に行なわれているためであると言われている。本書ではこの現象を東南アジアについて具体的に示し，中国，インドと比較しても東南アジアの人口現象がいかに短期間に大きく変わってきたかを明らかにしている。

石油産出量にもとづくクローファードによるビルマ人口の推定，またその推定量の信頼性の問題，ジョクジャカルタ人口のクローファードとラッフルズの推定量の比較など第Ⅰ章から第Ⅱ章にかけての人口量の推定と信頼性，人口増加に関する各種数値の取り扱い，第Ⅴ章の都市化の性比による分析など，途上国の統計を扱っている者として教えられたところが多々あったことを申し添えて，以下に評者の気づいた点をあげておく。

前述のように本書は大部分の章がその対応するオリジナル論文を基にしている。そして，オリジナルに比べて説明が簡潔になされている章では，豊富な具体的事例の引用にもかかわらず，説明不足でわかりにくい部分が散見された（第Ⅴ章19世紀バンコク・ニューロード居住者における居住の分離状況の図の説明など）。

もう一点。この本の性格上，多くの数字が引用されている。そしてそれらの数字はオリジナル論文では横書き洋数字で表記されていたものが縦書きの和数字にそのままの形で表記されている。このため数字の大きさを直感的に把握するのを困難にしている面があり，いささか読みやすさを欠いており，縦書きによる利点が生かされていないように思われる。

佐藤克彦（アジア経済研究所統計部）